

こうすけさんの なみだ

こうすけさんは、病気で頭の上が少しはげています。

四年になって、新しく来た先生のところにかげよって、自分の頭を指さしながら

「ストレスではげてん。」

と、自分から教えていました。でも、クラスの中で、

「こうすけは、さけたぼうがいいよ。のろいがつつるから。」

と言われていました。

ある日のこと。

体育のあと、りょう子さんは、落ちていたさとしさんの赤白ぼうしを拾いました。そして、こうすけさんの頭にむりやりかぶせようとしました。

「何するげんて。」

と、こうすけさんはさげびました。

でも、りょう子さんは、かまわずこうすけさんの頭にかぶせたのでした。

それから、その赤白ぼうしを、

「あんたのぼうし、こうすけがかぶってんよ。」

と、さとしさんに笑いながらわたしました。

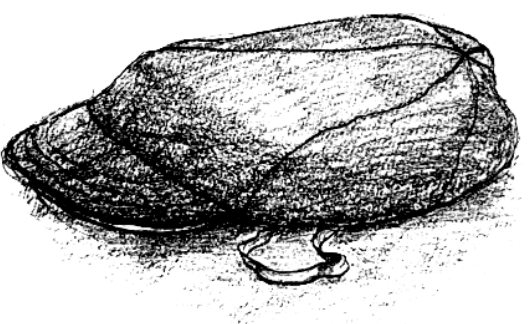
すると、さとしさんは、すぐにこうすけさんのそばへ行って、

「ぼくのぼうしを本当にかぶったんか。」

と言いました。

その言葉を聞いて、こうすけさんは顔をおおって

泣きはじめてしまいました……。



こうすけさんの なみだ（小学校中学年用）

A 教材設定の理由

本人にとっては何のいわれもないのに、「～菌がうつる」「のろいがうつる」などという言葉によって、簡単に仲間はずれが起こることがある。

しかし、これらは実際にはありもしない偏見である。ところが、それが真実であるかどうかを疑うことなく、子どもたちは「うつるもの」と思い込み、人から人へと容易に広がっていくことが多い。そして差別やいじめを生み出してしまう。

このような偏見を目の当たりにしたとき、それが差別であることを見抜く力を子どもたちに養っていきたい。そして、それによって苦しむ子がいることを考え、その子のつらさに思いをはせることができる人権感覚をもった子どもたちを育てていきたい。

本教材のりょう子やさとの姿を通して、差別につながるような自分たちの生活がないかをふり返るきっかけとしてほしい。

B 教材の解説

この教材の場面は、実際に県内の小学校五年のクラスで起こった出来事である。

こうすけは、脱毛症で悩むがあえて自分からそれを周りに伝えることで自分を守ろうとする子であった。

体育の授業後、りょう子がさとの赤白帽子を拾い、ふざけてこうすけの頭にかぶせてから笑いながらさとしに返したという出来事が起きた。りょう子は、こうすけにとってその行為がどんなにつらいことであるか分かっていなかったのだろう。嫌がるこうすけの頭にかぶせた赤白帽子をさとしに返し、反応を楽しんでいるように見える。こうすけが自分の帽子をかぶったと聞いたさとしは、こうすけの「のろい」がうつり自分もはげるのではないかという不安にかられる。そして、こうすけに事実かどうかを問いただしている。こうしたりょう子やさとの言動を受けて、こうすけが泣き出した場面で教材文は終わっている。

教材文には載っていないが、こうすけが泣いていることに気づいた担任は、りょう子とさとしから事情を聞く。そして、二人がこうすけの頭を汚いものでもあるかのように扱ったのだと分かり、「なんでこんなことされんなんげん。こうすけが何をしたっていうげんて。」と涙を流す。担任の様子を見て、りょう子は泣きながらこうすけに謝っている。また、さとしも「こうすけのこといやだと思っているんじゃない。」と謝った。

担任は、このできごとを次のようにふり返っている。

『このとき、私は自分の感情に流されて、表面的に謝ったことで終わらせてしまった。どうしてそんな行動をしたのか、りょう子やさとしに自分を問い直すことをさせなかった。自分たちがしていることが、どんなに深くこうすけを傷つけているのか、大変なことをしているのだと学ぶチャンスだったのだ。』

問題が起きたとき、「～してはいけない。」と注意し、謝らせるだけの対処療法的な対応では何も解決しない。こうすけに対する差別意識から再びいじめは繰り返されるだろう。担任が書いたように、りょう子やさとしが、こうすけのつらい思いを受け止め、自

分自身の行為の差別性に気づかなければならない。さらには、「なぜ自分はこうすけを差別してしまったのか」と、自己への問い直しができればなおよい。

そのためにも、教員は、子どもたちが問題行動を起こしたときこそ仲間をつなげるチャンスだと捉えたい。そして、その子がどうしてそのようなことをしたのか、その子が生活の中で背負っているものや思いにまで目を向けたい。こうした意識を教員はもちたいものである。

そうすることで、子どもは、自己を見つめ次第に本音を出していこう。そして、教員も周りの子どももその思いに触れながら、お互いに気持ちが通じ合える関係を作っていくのである。

このような視点もふまえながら、本教材での授業を通して差別を見抜き、差別を許さない学級づくりをすすめていきたい。

C 教材の使用にあたって

- ① 中学年では、「のろい」という言葉そのものに初めてふれる児童もいるだろう。児童が本教材を通して、のろいが「本当にあるもの」「うつるもの」と誤認しないように十分に配慮したい。
- ② 自分が抱えている思いを正直に伝えられない子から聞き取る場合、少しでも言ったり書いたりできたことを十分に認め、励ましていきたい。
- ③ 本音を出し合えるようなクラスの雰囲気づくりや人間関係づくりを普段からすすめておきたい。

D 参考資料

第59回全国人権・同和教育研究大会報告
「Kのことをみんなの問題に」

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	学習内容と支援
<p>1 導入 題名からお話の中身を想像してみま しょう。</p> <p>2 展開 「こうすけさんの なみだ」を読みま しょう。</p> <p>クラスのみんなはこうすけさんを、ど んなふうに思っていましたか。</p> <p>さとしさんは、なぜこうすけに「ぼう しをかぶったのか」とわざわざ聞きにい ったのでしょうか。</p> <p>泣いてしまったこうすけさんの気持 ちを考えましょう。</p> <p>3 まとめ 自分も同じような経験はありません か。</p>	<p>本文を見せずに、題名のみ板書し、どん な「なみだ」なのかを想像させる。</p> <p>範読する。</p> <p>クラスのみんながこうすけを「さけたほう がいい」「のろいがうつる」などと差別的に 見ていたことを押さえる。 その上で、「のろい」や「のろいがうつる」 ということ自体、事実ではないことを説明す る。</p> <p>自分にもこうすけの「のろい」がうつり、 はげてくるのではないかという不安があ ったことを考えさせる。</p> <p>さとしの赤白ぼうしをこうすけに無理や りかぶせたりょう子やそのことで腹を立 てたさとしに対して、辛い思いを抱えてい るこうすけの気持ちを想像させる。</p> <p>こうすけのように差別された経験や、り ょう子やさとしのように差別した経験な どどちらの立場で考えてもよい。自分の経 験は作文に書かせ、仲間はずれにされてい る子の訴えがあれば大切にしたい。</p>